百首異見

一

内閣文庫
和書
類 號 冊 架
二八〇九〇 五 二〇一 四
函
(二ヤ)

内閣文庫
番號 和 28090
冊數 5 (2)
函號 201 395

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

ノ女高子ニ
二条ノ后ノ
在原基経ニ
妹シ

陽成院　御諱貞明　清和帝第一ノ皇子

ながれたる水のそこひそこなりてふかくなりぬるとこそ
後撰集ニ三弱後ノ水ノ清キ
松ちかくなりぬれば
まるとてまつひよ湖となる水ハ
くていとふかくなりぬるやうこれをなほ
清蔭常言ニ此大海歌ノこひとへる所ノ水ノ事なる
そのこと事ハ風ふるあとをこひとをこひ
やとはいはゆ浪をこひちとをこひを水中ノ古みく水ハ
なれ道とつてけるさ事ハ秋ハ山ハ岩ハ出つこれの

明治十四年購求

海とひとつにまる浦の秋ひ真さのひとつまかりて
うの花うらぬうちにそすかたの海と求めるとはりは甚序
乃かひをなりて六帖まこの大海方をとこひそたまりて海
と成ぬるとかうり唯点のうへはこうそたまりてとうひ雑
あとうんりふよくこれひ結ふ〜類くくれもたまうまうん
とおふよせあう意ことして点の詞ようあけすとして後
ようはりてとんなりこうたて作ん兼補卿のいうせつを
まて海となうんの方をあ家卿乃古本とうてりたて
幾世こまりてとうを大やう掛れのさふふつさて重ようむ
うを今をたまうとうりつくきさてまうこ伊勢集ようはる

乃こうれ卿ひは雨こまたうさうこひ方まうり和こひ
兼盛集ようこ演乃うとうきうたあうす田ひ乃浦のこり
かうんとうひくなうつてとある結なとをこれみをとうひて
ひつまとうきこの
○改観を峯より落るこれのひとたい峯より出つるみとひ
ひくいのをつ出ようこうふつ那地たこまの川の海
ぶとにくようひえうり水とひうけくいとわ重りて
中こ河まうこ海事也こひとをとうの事れ思ひうけひ
海とれうこひんまこうとうこ流ようなくていうこうぬうこうれ
せうこりかうをひつうなるつ又云諸抄ようこ那の川の事

といへるは筑波山より志づくの下をくゞりて川ともなれとす一滴
清くなかれて男女川となれるといへるは萬葉集
第十四東歌に筑波祢乃伊波毛等杼呂尓於都流美
豆代尓毛多由良尓和家於毛波奈久尓といふあまり
よれば此浪更にしといひ初学者これを混じて云或説
に此岩より志づく此下をくゞりて一滴つゝ落るなどいへは
萬葉に雫の四井とよめるは他所の溢觴の語なれば取
あはせてつよくいひなさんとてするなれど萬葉十
四常陸歌に筑波祢乃伊波毛等杼呂尓云々とあれば
いはゞの下くゞるなどいふは推量なるべし岩ととろくはり

の名も落る事といへり此説これ非也また此東歌乃岩も
とゞろに落る水といふ事を今此みなの川とも同じ流れに也
清みあたらずは覚束なく候まゝさはつくば乃山中には
いくはくの流あらんを数をしらへつゝ此萬葉の筑波
祢乃松をさし清くに岩の事といひ出ますより如何なるまと
ひを出さし也これ相模根白松甲斐乃松なとの松にひと
しく只山といはす同じ意にて高松をしるをいふにはあらう
す山ハ峯をまでかゞふへきこのまにはこゝをいひなしへる
也同常陸歌に筑波祢尓由伎可母布良留伊奈乎可
母加奈思吉児呂我尓努保佐流可母また筑波祢乃尓

比良波麻欲能巻世よ都久波祢乃作中流能波奈能
なと布はすとつゝ新素早百合とつるさゝ高根の事
ふあゝ大やう麓をいつる也此御歌の能波根を共ゝく
ちゝとつゝ事ふく同意也さて其ひその高根をさて
て巻よりと宣てり古今集をつくる比巻のもみち
葉落つゝりとあるこれ同つる也諸注皆ぬ泊とのこゝろ
い違てりかの巻後ゝ奇のふをすれいら能波祢乃祢呂ニ加須
美井とつゝ辛豆久波祢呂能麻乃作古なとゝい
つるをやいつれ和を去れと今い能波ひとふりて年
せり又巻葉の岩もゝろとつるい能波ゝ比もゝろ

ゝもあれ落ゝゝゝ早川をとゝ三の川をとゝてつる
まいあゝすゝてゝ三の川い巻ゝ侍ひ巻ゝ原の名ふく
古歌のゝとく言ゝ比下ゝゝはゝれなゝるゝ甚故い
巻葉巻十七久比敷よ久方天印巻水無河隔而妻之神
世之恨まゝ巻十四よ麻可奈思美佐祢令和波世久可
麻久良能美奈能瀬河泊金思保美都奈武賀前乃
三ゝい天乃川い宮ゝよゝゝすれゝゝ水ゝゝれい三れ川とゝひ
後の歌い宮ゝゆゝんとゝゝ巻をゝ波乃ゝゝきゝみち
なんとゝゝる那まい巻は巻ゝはゝ水れゝゝ事ゝゝ
ゝゝゝゝみなの世川とゝ二ゝ又巻ゝよ高尓毛巻人者乱

若水瀬河下流者渡月日異巻十一ニ浦福而物者不会
水無瀬川者而毛水者迦云物手まゝ言急者中波余
騰益水無川絶路云事平者紀名湯日古今集まゝれ
せのありて引ゐなくいとうみるせたの下ふるひくこれせ
川行ふ事なとありてあれきたるる事論なく迦ゝを
盛義記ニ高倉の宮氏山城の井氏ゝ寄命てゐれ
ゝ川ニ流やうゝんとゝませるる海方ありこれを井氏の川
瀬の事ニなりて水ゐれるる常氏ゝまゝを思ゝやりたるて
あるふゝるゝ川とゝのゝまゝ流ゝを彼記ニ宇治より
義引ゐゝ時あるゝとゝ流のなりとゝやるひくゝよみゐて

ゝるゝ氏ゝの事ゝく仕ゐ引ゝるる時おむひくゝよみ
引ゝる詞ニあるゝ此やうの海軍ハ五月氏まなるふ時雨
してとゝませるゐんやハそれハこれ世川ハ水無川ゝ船のせ
川ハ水無之狭川なりてあるせく此ゝ形の川を水無之川
の意なる事ゝ知ゝられハ物ゝ平ゝ流ゝ流ゝ
水岩ゝるく瀧ゝ世ゐあるゝと知ゝ引ゐみゐゝとこれせて
ゝ氏ゝちゝ世ゝちゝとせゝるゝ世ゝ流ゝ世ゝ同ゝ或
言便也又初ゐふこれの海ゝ流ゝ川ゝ氏ゝまるゝ流ゝ深
く切ニなる世ゝ引ゝ世ゝとゝ末大ゝる川ゝ寄ゐる海ゝ流ゝ
ハゝくゝれゝゝとゝゝるゝとゝ又ゝるふ末ハ川ゝとなるまゝ流ゝとゝ古

仁明天皇ノ御子トナセシモノ
嘉和五年
皇太子トナリ
禁中ニテ元服
正四位下ニ叙セ
ラル進ミテ昇
進シ貞観始
正二位左大臣
ニ任ス

説を信じて後波山の麓ふもとの川とうたがうまと思
つるものゆゑにかの世既に年せるうきくみるの川も岩より絶くく
よ流き落るほとの名ゆゑにて流きてこそいまりたるまをさ
してこそうたがはれんく

河原左大臣　姓八源　嵯峨帝第十二皇子し母正四位下大原金子中将

みちのくの志のつのちすり誰ゆゑに乱き初めしものぞ忍ぶ
古今集恋四題しらず

詠みてかるる物まきたれ取ることかくるる心とは
いつの形ん誰の為をもみさんなと思ふ形るなとも
也こはんより結ぶとうけくよりある形るへ波潮ちゆゆ

めり此ものの前よ彦ひなまを波やさわくく山の内の流よせ
にうるあるなにくそてあれ初紀波の色原くこそりんを
き見れやなとあるを皆うくくけるあるあるうる形るうる
形るふい形るけるすとりの地うりうけ興風の歌は友
なれくふの所にうけり初二の句はうるれんとうるうんくあの
序のこ荷田東麿の伊勢物語序を問ふ云はとうる
冠辞ふうるみちのくのとはいへ信夫の郡より摺形衣をき
きる事古記よ沙汰なき事とうり初学よ此物語
と細物して云古歌よ国名地名をもて冠辞とせる事
甚一二をいとく歌業奏四よ石上愛十方雨糸撥開哉

古今よ津の国ハなふハ地ちらハ山城の国ハ山城の国ハ
ものこしろ是ハ是ハ遠ちく甚ちとしの事をとるもうてく書り給
ハ其ハ蝦のすり衣志濃ハ上のうれしとしみうるとをもふ〜必
しを陸奥よりハてハ陸奥ハうふとをうろうえ雑うろへ〜言く
うれ志の山ハを志の山ハ其形とすりうるものとハ志うるく
かよわむ〜さしのすり衣志の其うれとハてうをてを
ハうる地とハ山ハ遠ちとふ遠山ハ山ハの影ひよ志の山ハ其
形をハうるハ形ハ〜をとより郡名ろんまハ行まりせく信夫
のうれとハをんをハく武人信夫郡より志の山ハ其ハ布を
山をる地とハ山ハを志うれ古人今顕須よ陸奥ハ信夫郡よ

もちすりとて数をそ〜たるをうふハうるを信夫もちすりと
ハとをうをハ山ハ其陸奥より出るものをうれ志の山ハ其
をうふ恨す今古人のうる地とをそをやすをうれ奥ようを
をの地をて顕須よハくをうふ陸奥の志濃ハ山もち ハとい
ひ東鑑ハを陸奥なる信夫ハの布を伊達せ〜事ハをた
ハ山もちより所とれ志事ハ山ハうれ ハをうふ此せうれ
歌かハ ハ所なとふをうををを布てをふ名高志より志のよ
ハをそをく彼里ふあ中き ハ布を出せ〜ハ福倉ハうろ
ハ志ををハ〜ハ武 ハとハ〜なハ〜志 ハハ世よ多く信
ハを又同書云今の信ハハ山ハよのこわり清ハ納云

うれしく軒のあく端なとふき出たるおりしきとのひ者ども
若代さそこに又志りたる人〻今此京なとに彼佐の草
の生る事なれは必別地也彼の葉一ツを又ちらしたる
の杉なる軒なとふき出たる瑞〻しき志の草なりんとい
つもけはしきかものして今京にて軒志の山或は一切葉なと
ふるものは葉を彼乃葉ふる似ちこと迚世かの字ふまる一
種乃葉と志のふとひくくそなをすとりもとり此志の
ふい軒志ふとひ別て迚此志の山葉ふ一ハいわれ草
とひくく志のふとはいとるすしるめ迚さるかこれ葉ふ事
ハ別ふ海せり事ふ順徳院のうるき軒端乃志のふとよまを

ふくてをすれたち此軒志のふなる事所抄よりをそ志ら
生ちり同所葉ふ孔葉此葉志乃身此ふ表ふ思ふ
にをれる勢のも初ふ葉ふの葉とそのてをを彼志の
ふ葉乃一葉なるかちとをすたちり今を越中わら
みくいわを草とひ美濃ちりみくい志ふ草と
をいひくかくふ奮称ふ又童子問ふ志のふをり
とは思ふとふ葉と称る衣ふすり付ちるとふ萩を掛り
けるを萩すりとふ新也とのまとふ葉ふ事ふのそ
むへきものふあるすふ公忠集ふ歩ふてふ志の出ふと我
者此思ふ葉ふてをれる也ちなるあををうくふ志ちと

思ひてこれをやとて書て四条へ立て人に見せたる
ちさうろうをあるときこのしてきるをて出うちを入くやうと
てとまりて呉青色を深くうをとうようされせるのを
○初學云他の雅人のまことをそれうをまねびうるんと
とうるる水すを呉そこ加ふうとみることいさまくと思ひ
みうるとうとうるは形也今孔んとうをとうるは人をうう
らんあるーんとうをふそさまくく思ひみうるく意まあう
すうれる雅ありうとそれの品なるにこひみうるんや
そうるくみうまんと思ふうれなうすとはよくはーつけ
て芸をうるもうるにうーまそ我をゆるふううなとうう意ハ

なー雅品は思ひうるんとあうふうはをとうるとは
雅ゆうるよみうまんと思ふとあるをやうくうるうくーはる
伊勢物語のみうれ初ふうとうう意をどうまうせくく解あるま
るものも又同書云ものちするまう又孔子と云詞あうは桃
草子に山盗うをすうをとうるうたるは千はうま狭衣よ
我んをとうるを加ふうう神より外うる後ありまをとい
ーるにくく思ふいは拐付るは物の形のをうふをあうをもちを孔
まをを移るは品ようーも品ううすくくの物うをみうるとうとうーは
を出ふかうて人皆をあう物まをみうるくてーう詞あうと
とうーまをとうるを形也先をうをるとうふいは物ちうひうまをる

の称なるといふはゆきかふてまたしのぶの称までひと
つゞめて推する語の本用としてまとゆかしきはおもふそゞろ也
さまは摺なるところ手すい何までもしのぶところなるはいふべく
ともち摺はしのぶ草にては形ひろくてかの枝うつせる事は
かけちらして摺すりしてはなかなか摺れたるさまをなすべし
たとへば今より草のゆかりひとられんとちられしゆきさかりこと
まで結ばれたらんところもちられみだれたりともいふべけ
れよりてしのぶのひとり技甚名を得たるなりへ又顋にま
もちすりを髪をとりてたばかれたるは思ふ草なり
称としかゆ哉もつまてるかきちをいふにはよくかよふへき

すりなと経きたるといふうふはたまたまも雅し枕草子に
青色の紅ににぬ摺なるところしたる水干袴とあひ紅梅
なえきぬの上さまぬものにてひきぬすりなるところ袴
もせたりなとあるは摺ところしたるをいふの義をもつまれ
島にまれひとれむらさきゑなにに摺れて紅ほうつなりにも
ろうさん事摺てるもの常なるしさまは撰ところすなと
いふはなちれてはちりむしきちらてる事也よりてしのぶ
摺はなところ手もといされさきふありひと紅鳥なとを
もちすりとはいふならむれともはらしまれところおたたとひ
ともみてなつくの摺衣これまちまちてこれなりともつゝには

いかにそ侍らん又独此ころは人の志ところなるをいふなれ
ハ此證に引へきにあらす

御母 贈皇太后宮 藤原澤子 太政大臣總継公ノ女也

光孝天皇 御諱時康（トキヤス） 仁明帝第三ノ皇子

君かためはるの野に出てわかなつむわかころもてに雪はふりつゝ

古今集春上 仁和の帝みこにおはしましける時に人にわかな
たまひける御うたとあり君にわかなを奉らんとてわかなを野に出
て若菜つむ袖にふりかゝる雪の降かゝるを遠くも今よりおもひやる
こゝろの御歌なるへしさて野へいてゝ若摘うちてよみたまへるを
そへてまひらせられたるへし誠に實はむかしよりかくこそいふへき事
論なしさるは君か為なと其つかひたまへる語調あるもの

遠からしとそけにそ歌乃さまなれる同集春下に相志れる
人のまうて来て帰りにけるのちによみて花にさして
つかはしける 貫之 ひとめみし君もやくると桜花けふはまちみて
ちらはちらなんとあるをたゝ花のうへにいひなしてさ
てまつのよみてうと花にさして遣はせたらとすまとまとかり
實を遣はせすけ斜にかへりしにくく今に似たり大和物語に
よみ人は宗貞ぞ母の梅の花をよ書て出させるにこ
君か為寂はすそと外して春の野に出てつみてける若菜を
とあるなとは摘てのちの其人へおくらむとてよみたる遠これを
とひよろしくまつたる事なれはまことにこれを遁れて

ばかりを春の野に出でてよみなせる意なるべしかの
あるべき門人成下宰文云ある人はなほとて親王の御身
として雪ふる野にはわかく御もつゝ摘まゝ人ふ
若菜をつむ日しも雪乃降るにはよりて物のいとゝ消ぬる前
らんとのべる歌さる事也因集書下毎はれをまて人をは
かなくなる業平朝臣ぬまつて志ひく打つる雪とあるを
必ず雪ふるゝ拍せられぬるをあく人にてをせるかゝあ
とかくよみるて歌乃こゝろなる又大和物語に監命婦の方よ
りをこの御ゝ子すなはゆれをとりて移ぬるゝ物を書よりたる
ばや親書ふを鮎とれんとるてやまるとあれと志をも松

のれとりてやまるゝふ姫すゝ業業巻四ゝ高安王裏鮎贈娘
子歌奥野往邊去伊麻夜為妹吾漁有藻刈束鮎巻廿五
相田之時使舊嫁王洗山脊國贈薩妙親命婦等所歌
安可禰佐須比流比流波多ゝ婢豆奴婆美麻乃欲流乃伊
乃未仁都賣流芹洗禮なとゝ也寒ふ三つゝ沖ゝ色
ふすれとまりふ代おゝ芹を忘ゝゝ摘ふ
しゝ船ゝ人ゝ苦労をかまへいてゝ人ゝ物也まゝ業ゝ
するゝ代ゝ和あゝ朝食夕食を拍せん神なれいおゝ
ゝる女代をゝ男代すゝ代ゝ男代すゝ代今乃世代
ちまふゝ又ゝ人ゝ新撰業業ゝ弱なゝゝ也ゝ

まゝ見れんまれつゝ[illegible]ありやと詩ふを綿く曠野集
驢行ゝ春嶮探厳又盈嚢なるを共さるゝとゝめを見
んと行て此御情也さまくく野趣の興よ剪てこの新
むき格別の事ゝて常ふあるとゝ又さるかゝてよゝ
なるゝ男歌もおれるゝいとゝまれすといてよいあるゝ今
乃御歌ハ要ゝ多業ゝまひなゝ此事情を申て海ゝ
きゝとゝふゝとゝより昔よりゝ職の男ゝ業つむなゝ此おゝ
ゝ歌ある事野いゝんやさるゝますくゝの事ゝ歌をの御身
とゝてゝるゝ人此ゝあゝ乃多業ゝ[illegible]ゝに雪ゝとゝ[illegible]ゝ野原ゝ
ゆゝふゝ[illegible]ゝゝんゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

なゝ此ゝゝるゝたゝす初學ゝ云天皇此御歌ゝゝ[illegible]也
撰民乃事ゝゝゝんゝゝす歌一首ゝゝ人ゝ和せ一例ゝゝゝあ
らゝゝ天下此ゝゝゝ大改ゝゝ此拙乃歌ゝゝあゝす
この風ゝゝゝゝゝ民業ゝ[illegible]ゝゝなゝ部ゝゝゝ也
ゝゝ

○初學ゝゝ此業を野ふゝゝゝ作る時雪此ゝりて身は
寒ゝなゝゝ歌ゝゝて作ゝゝゝゝ甚ゝ乃ゝゝゝまゝ此ゝ
ゝのゝゝゝゝ古ゝゝゝゝゝゝゝ非也ゝゝ業つむ部形ゝゝ
業此作ゝゝあゝを過去此ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
也作ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

元亨六年
中納言任之

中納言行平　父八　陽正尹四品阿保親王　天長三年在原ノ姓ヲ賜フ

立わかれいなばの山の峰におふる松としきけばいまかへるなり

古今集離別の歌にこれは行平の中納言因幡の国に流されける時に詠める歌なりと

くさ枕ゆめかよふらん道遠みまつ人来ずあけぬなるかな

と申せるなと当世の京人さまも此卿因幡にまかりて文治寶源年七月八日に此時これをうけ給はり稲羽山を和名抄に因幡国法美郡稲羽とある所の山なり今も松のこれり其下ゆく流れを稲羽川とよびて此山にいにしへのこの国府ありしあまたゆゑもとより郡司をゆゑ

たてふいとんや其守となりて幼人をつれくしてこの国へくだりて此国よりわたり迄其郷を代今を国府村とよびて改元歌云歌

法ゆゑ結因幡枕をも因幡国にまかりてこの法美郡に

ふもとにあるなり紀兼卿ハ美濃ゆ屋せられと行平

法師ハ在乃業平国史ハ人ゑ人ゑ上の陰とを明らかなる因幡

国とよびて法師ハ在乃業平ハ在原ハ在原の時より

ゑとせられ其ゆゑ拾遺ハ在原ハ在原の時より

人々名ゆゑ書けるハ前別せる所也故ゆゑ古今離別歌有る

出せりとの初学者ハ古今乃別ハ其郡ゆ入ゑ出ゑ

ゑ形くて今ハ国ゑんとの上ハ其まりゑ京ゑ出ゑ時

乃言ふるハあまりといふべし實ふ志ありてこそ近世の歌よミのこそ
歸る事にのミおもひなまされハ志る方志らて花ほゆるより
ふと志る思ひのまゝならぬの世中とうなるハ其所を去とふ人もあと
にく心ありしへきまゝ拙あへハなりんとも移りよ出てくるまゝはなき
まれるへきなとよみてある人ハ狸とふうらんふ移りしきことゝ論る
し文まつりしきうハとくかねより結ひ入ふ今すりて近領張と
ちて歸洛する人々を折まてせく國人乃喜ひ今せよ結への哉
なす今をかんとおもつのまいそへまく適ふ取此待意
かもんとつとせあそてなるをもむる詞まて喜ひ會まし くかけん
取まれんかれよ志るのはいみへからぬ事也わざと設出くよをなれ

稀らひとつよ見えくまゝふいつきんハ

◎初學言結とうしうしきうハ今の人のほとを取く立てかへさて
相見えたむそとなくさめてよむる也といへりこそことふくほまれ
くと解くる詞乃取ひらるうしかくてハ結ひて但乃限みなん
すまんなきハやうて歸するるとんとるかひとゆゆかられうり
ゆるへへうるふハあらて結ひとさるハゆくとあくすふハ此さそてかり
こんといてなりの此意也まて同書ふ同橋乃山といへるハ萬葉
小陸奥乃小田郷より金を出せしを陸奥山ふ黄金花さく
とよみしことのりまゝられ和名抄ふ此[illegible]の[illegible]
美郡ふ稀羽てあまいハ其への乃三をいふとせさくて古の

江家次第ニ在五中將為孫件后出家和様ニ成為世後到

人乃ことの葉にもとゝまるものなれば古人はこれ
らんうの陸奥山と今とを同一事とおもへなるべしこの
国情は橋羽郷うゝはうあるあり況や国府すでにあるをや
續後拾遺集に新乃田舎人ゝ中贈る藤原
相如女の風ふつゝをも出一国情る橋羽郷より新乃方
なまたこれうゝれいなるべしとまつ国情のほまる
橋羽ゝ乃国府をきたれる也

在原業平朝臣　阿保親王第五ノ御子　行平ノ中ノ御門　母ハ桓武帝ノ皇女伊都内親王

古今集秋下二陳乃后藤原東宮の御息所とまうす時に屏風

陸奥ノ国ハ十島ノ内ニ小野小町ノ尼ノ世ニ世平五書下リシ図トテ衣冠騎馬ノ図アリ江次第ニヨルトハ生髪ノ下向スハ剃髪ノ係ハ半髪ガニギリトノ図ニテ

よたつたやふるのみやこの流まてうゝとかうりけるを鄙すてよ
ゝとありなるゝ水をとかゝゆたてゝ楽をうりはすい吉
重氏ものこありとゝ神世をさぶらいまゝゆす
らたゝゝてゝと無しうゝ也いゝゝあまと龍田い年れの風
系なく神をひるやうるまは神世を引よ志ゝき也む
さと神世をゝひ出ゝうゝ水ずのまゝ清瀧川紀川なゝいん
ふひゝ毋次まを詩四川ゝてゆをたゝ兵ゝるなゝあるゝゝ
初雪云ある家乃古を法ゝ毋ゝ泉ゝあゝて綾也とあ
るたゝよまゝ凡顔顔ハ今式なゝあを見ゝて絡ゝを志ゝて雲ゝ
ゝまゝて紅葉縁なゝふ深ゝ也今云志ゝ海ゝ同一古今

白妙の霜の新しき衣を重ねて着たるかの
やうをいはまほしきなりとよめる歌也世人友平朝臣
ふかくさの川を紅葉の流れたるを見て
まことの川をくれなゐに染なすとよめる也
ふかくさの川を紅葉の流れたるを見て
ハゆるされ事なりて作りなんとつくり出せる也神
世をきりたい神世をきりたい也今まで又ハ和文字なりい
ぬるらすまを古へいさてを同じ也る例等
○改訳云韓紀(カラ)とつくる事也人乃世とれまて神功皇后三
韓をきりたいの上後世つくる歌也是ハ神世をきりたいと
ハ記紀なれ事乃是ハ神世をきりたいと

つくる所をつくりたいとなれ事なれ和歌の源
をつくりたいとつくる也此つくりたいと紅葉乃
事ハ人事なれ所をつくるをあなと時代とされまして
よりと思つる所をつくる所ハ神を祭りたいに用ひる
なれ乃事也海を蜀江ふかくせるをふかくすれとよ
里今をこまをを事歌をせるふかくしたる也又云ちをやうに
神とつくへき枕詞也日本紀ハ厳忌をつくる所ハ
なりきこゑる也きたい神ハ善神を賞罰あることに
まを代ハちをやうとつくる初言ハいみ一代事
りく悪き神をあこうとなれ京をなりていすつくれ

古言を猶して出雲くにこれい海人きさきなる神い
ものとんはかりこの方みくに善神ともすみをこの冠帽とせく
事に素盞嗚尊と出雲地拝するふこと書紀まこと古事記と
をちやうこい先神よ冠らせこれい治よ人とを宇治とを
作けるいさて悪くく専ら神まこと冠らする事とこと記
く語の意よくを考てめきる迦もとちやうちやうこと
墨逆の移也よりて邪神西賊まこと冠らせり甚こと紀て
乃ちりて善神まのこと冠らすくさ磐こい玉垂氏載とを小
篇とを小鏡ともつけこうこい堂とこ云一言ふこれい迦こうを迦
也こと小篇氏ものこい国ひこうこ古くこうかふ紀こすう

いひなきてこうこ
○初学ま紀篇乃むくこうこ白波をひまくこ立
東こうこ人ゆこんと紀ゆきこと又こうこ人こ邪迦
すくこ屏風の画なこ甚こうけるまこあるこうまこ人こと
出てなくく実景実物を紀こうこ人をこう我古人氏こんん
なるまり此画乃きまこうこをこうこ書くかきこうこん
乃氏こうこ大きやこれるもみち篇氏こうこ紀こうこ乃なるう
けるくこと古てかこ治ひこうなこ古代乃画氏きま思
ひやこ人人其一業こうこをゆこうこ氏こうこ迦きて
こう歌のこうこうこひこうこきこうめひくく今を又こうこ人

すれ更に白波の立ちしげくさて紋すれ同じ波麻風の画
と素性法師がよみ給へる歌には紅葉の波
やたつらんとよめりける紅葉の落たまりたるにて波必
波の立べきなれば其はかりて其紋をさも我が
よ紋なりけるよしなる意れるにて今ある画けり也又は
波のすきまを知べし楽天が太湖の詩にも黄纈纈林寒
有葉碧瑠璃水浄無風と云る詩あなと似ると又これ
は寒林の太すむしも波あるを言へるにて又今とたつ門
人管家節の語にゆえをあいは結纈染也と云へるは
とふくすれたち今紋立ちり波まで世をり湯雉子画拭

なき蛛の巣あるたらんやうに藍なとにて立ちりとさ
るは太きうる纈に紋意の所しるうこの也さてやうの紅葉の
波にましはえてあらんゆゑにそれをもて画ける波とも見なされる人
きそはにたりて目結の鹿子染なるるは立ちりく似たり
ともいふへきがは目結と纈纈ともにそれそれの名はまた紋を
もとより目結をもち波ともいへる事なり

藤原敏行朝臣　父ハ按察使冨士麿　鎌足公ノ孫　母ハ紀名虎ノ女

住の江の岸による波よるさへや夢のかよひぢ人めよくらん

古今集恋二寛平の御時きさいの宮の歌合の歌とて
太からはいかなるあやも立ちてあらしとおもふ夢路のうへ心され乃

人めをよきはかりなんと解りれるを去ばよたるべき
ふ無ていんうひのやうそ夢にを入しもよ海さへ共さへいよ海
乃者共通海さへとさへ人ふを調よ作よて志ひうく三月りれ
ちりひくすう晝よ寄てくいつるふ共水す現よ志ひて大よ
松の通海よ行てりてい下るもの也すく男共思ひよ通り
ハ寄まりやく者共ふさ形ん事海うきを晝のをなく
よ海さへとうるをかさいうりみてうくきことわるさあうさす
初二月ハよ海よりさん者乃根の三海ふ共わるさ海のふ共
松乃志ひてえふうる波乃方きある所すて志影りをひ
なるさへをひてきるをもてをふををり出うる也

○初夢ニ晝間よ人目を悔るのこなるまうる共者海ふを
へひうまりふりあひうる共ハそれうふ人めをさうるやと海
うをとふうるハ非也ひくて共よる共夢にさへ人をうんる事
なき共甚者驚ふ人めをさうるなんとやうしきうえ
て事克夢ふをひるにまりうる共きうるまれ者を
ひうくさ海者ひさへ人めをさうる人何事そやと海うるれ
ま共ひうをきまそうと者めひうこうたるふうあれそま
たよ人めをはうるあやとれ行なり者うる共ある寸同集ニ
三歌ふ共きをうそあるの者にさへ人めをもとひうるひ
りきとうへふ同一意也まこ晝者よ人めを悔ふひうを

又伊勢ノ御息所ニ
ツカヘシ御説
アリ

なりしといつたはる事跡もなけれ

伊勢　父伊勢守継蔭（ツグカゲ）仁和ノ頃宮仕セシ也伊勢守タルニ依テ伊勢ト呼フ

難波かたみじかき芦のふしの間も逢はでこの世をすぐしてよとや

新古今集恋一題しらず難波江に生ふる芦は其みじか
き節（フシ）のまばかりもつひにはなくこの世をすごしてよ
とかの心やと恨みけるにて末よく聞えくれまでを恨
みたる人へ此世とあるも芦乃縁也吉文云二三の句芦
乃短きふしといはんを調にかけてみじかき芦の節とつ
けるまで短き芦とあるはあひしといつるはよし芦の
ふしくれあのことは長うゝぬすのなまは太うふ深きなく

いへるもの也同集雑下ニ津国にありて河乃芦を見人のもとへ
花山院にて御前乃芦かりたるをあはれ短き芦乃
世にもかくれぬとあるなど芦のふしよ世とかけて意今と同
し又万葉十九長歌に靡珠藻（ナビクタマモ）乃節間（フシノマ）毛惜命（ヲシキイノチ）乎とあるに
よられたる也此玉藻乃ふしのまもをしき命とよまれたるまでて
意を潤色せしよなりしきものにて今乃歌はよほど次
○初学云短き芦のふしの間のことき志ばしの間乃逢
事もなきは此世をひとりすごしてすぐせよとの心より
やあらんといへるは非也これは思ひかけたる契をつひに
あらせずしてすぐすべきものかといへるそ後の也

はるゝ〻ゆくすゑまではかれくゆくゆる道を思ふにまよふものんこ
やあんなとそひたりてこのうるこいつるは世すは其原撰と
又くもるこゝ又言此世と思ひてゝとやとゝ美濃より彼くる
事と黄泉の過去往水の過ゆるなとつひ今の詞も取
まりたるとゝ思ふなといつりされい世をとゝは命乃
終るまてをうけくるゝとゝ思ふこゝを彼世とゝ思ふい
命乃終るまてをとゝんいかとゝ彼世とゝ終る
きゝと今まりかてこゝあんをとゝすあひきとゝ
思過ゆく彼世をふ始ふこの歌をなきを
うゝみこゝをはもむされる形調美濃より黄泉の道ゆ

はゆのゐあるなとあゝ彼世へまはとゝるゝ事也と
此世を経ゆくとゝ思ふてゐる意ゝ

元良親王　陽成帝第一皇子　御母主殿頭遠長女

後撰集雑五事出そのゝ京極の御息所ゝけ
るとあり拾遺集ゝ詠ゝすてゐひ出ゝ
思ひこゝて後のゝとゝ思ふいまゝこゝ事ゝ拾ひのゝ
ふ歌ゝ同ゝきなんゝ身を捨ふ
命んとゝひ業なるゝ思ひの意ゝ事い
るゝひとゝ命ゝの歌ゝ三百ゝ箱彼なゝい

源標ふようやうく方をたうそをとうそん枕のこはあいかく結動
のすこやかきをとりてすてもおうとうとうとうとうとうの語勢
ありこれを近世俗あと同じくこころうえるるハ非也俗あいうひ
事なりやうれ意はあいかより此ものうる語也さまたはあ
と俗あとは立うつるく立なるふとりつなりて緩急死活乃
たうひあり将又の学をあそこうるを活ることをうんうひうり
あり旋機なるとはことをうひ或いたるくはるめくはるか
こなるつひ伝ることはこくと中よせはるとやすれぬなるつひ
なすあを活物れすこやうはるをとうるへ一此今はるはと
とうも事ままうりてやうてをうれいひるきをとりて業業

業字は急死に甚毛同書左何者二人同他言辞痛者将
者とあるなるとこに似るものそれを同ることゆうひうる徴
乃今とこうるをゆうこうてハ活あと同じ
るゆうをかれうるぬ甚すと似うる語なれ近寄とうた
源氏相業は今はこの世中をとすてうるあうは成
ゆくハこく若業は今はこうなくこうるへき中となり
こく乃新あうひうこうされとをうり死活の語脚こうれハ
活とのことを杉のつう俗あとうへよ所はあと出けた
なるはあるつれとわるをこのうちるをき勢ひあうと知
一一又業業中れはあハ活ひをまかたれう活むへうひ

○歌詠に偽ぬまじとは古めかしくいひならはされし儀異ぬまじハ
まことを詳にハやうて詞書に事あきてとあるをさして云
まことにハ非也さてハ歌の夏色を形偽するといふ也されハ彼も
此も推はかるまじき同じといふことを人なれハ其ふりにて其
すちをしらぬ事なるそハ今はく同じとの人またハなれあるし
実に同じ一事とさく同じといへるんやさてハ無級に其の
ひとまひぬまじきと詳かにそくりて其をあきらかになりぬ
○初学に歌よみてよりせんさくなかまた枕さひに偽する時
思ふまにといふ虚も非也偽する時思ふにまかすといふ意なるんは
ハ思ふに任すといふ古の格なるへきをたゝまもひぬまじとハいひかたく

古ともいふへからんや又詞書に後に切く家紛てハ事別しふ
ともかく今案して新しうそいふともいふは今さらあらぬ
切紙伝ともいへ世人これ古らぬまじハ歌を詠ぬも同じ事也
といふことに詳なる也さてハ古き名ハとてもいふぬまじハ歌を
よんそ浮かなるとやうの世なまてる詞ハさて紀意なし落
て来まみさとらしてもといひてる切なることいふへうかへ不
成くすへからぬ事也とりてもおこりて後なる此今更なす
なしふるなと形そくも宜しからぬあらす数句の偽ぬまじ
て詠るをと思ひ絶く今けと偽するをいふ上二句此をはさ
同じハそのくさえ古するをと称んしてとまひあるくる法をもうの

事由あるべきいなまれ[illegible]やうて更にうりれま
とつかさて作るうるし[illegible]れ塗りさきうを世よつけ[illegible]
い形を[illegible]て漆ぬて身と考へてんとまてとひなき所
ものやんと告やりあるべつる也又洞書の事由あるとと解く
すべく事とつかい古四とふ物ぬるのようとつかを
物也世毅事あり事世ぬり事にあらてなと物まの
せくつ代皆四事のをにくようきのをいるつ所石祥の
ことをきひとに合く同ことに事ことなく
事うれる常れうへのようさ方と塗ぬているものの也ま
と事ふ作きて事れ世ようになといる影ひまるうる

いうふうるまたるみく今とけうと也漆すてうに又ミみと
作ていに尺すと言ていうる丈をてみ代漆海をとう
る把なきい水脚津藏のをなるべしというを脚也こハ河海
の水脚と言ていうるものすていを殺彼に引作綱になと
船乃出入すう所よりあり出深きて作きて船とやうとまるう
標杙也と知べし蒙業巻十五長歌よ之保麻知豆美乎姫
伎也業濱云巻サよ保里江歌里美乎姫伎之都く云
和名抄水を水脚船乃秘あり事竟ちまこにてべ榜
水ひとべ尺すと刺言て乃代櫓減とはうる代ものうる也
きうと代水脚ものと言つきてあべし

剃髮ノ后
雲林院ニ住
律師ト称
遍照ノ子

素性法師　俗名玄利（ハルトシ）　清和帝ニ仕ヘ右近衛将監ヨリ

今こんとゝのひたりに月をまちかねて
古今集無名歌　月をまちかねて
乃一言にたゝるかく四つ
更しつるかとゝさてゝ人
ゆゝやゝ
なのめにやあらん
より法師よとゝんとゝ
詠ありこの別まよ
○初学ノ今はまふこんと人はれくゝのこなりゝと

古今集ニハ
参河掾多
文屋ノ姓ハ
天武帝ノ
皇子長親
王ノ后ナリ

ハ歌也ゝてはゝまゝこゝ乃こゝ寒ハこゝ心
ゝ
ゝこゝ
ゝして詞ゝ
事也ゝ

文屋康秀　先祖詳ナラズ作者部類ニ元慶元年縫殿助ニ任スト

古今集秋下是貞乃みこ家の歌合ゝ紀氏ノ
筆也ゝ古今ノ物語ハ
八段説ノ寄ゝ新撰萬葉ノ歌毋秋之草ノ

逆折穂者祇（レヲルレハウ）（ヤマカセラ）山風緒荒之云（アラミテフラム）濫とあり是を可うへき
落白かの古本にはわくしてたんとあり此新撰の意之云
濫の字を志ろよむべくに及ゆ点はたに白をへく第五と
ち古今序の注はたに聖人の第五をもうつを指よりうへ
る所とあり人ゆまたに可と思て注たんとあり所をまれいたを
かををそうておうをふなへく第五れをとれいうへ山風と
ひくてふんとよむべきうきそそけよき風のきへよりあふ
こちす歌の意はあをを逆ふりまくふりを草はれな
ひよきをとれいうへ逆此山風とあくとうるいとくき
ふあくうて風のをと開悟しうる逆こはよ松風の今ハ

あくとあそこうれくさなとたをふりてたをりて次郎百
首にさをとあいとあの所ひくうれひうあれをくうれの
格の板戸やなとよりう嵐のきのひをかたちをさ
まを逆うへい海方此こうをそちうをとをうを今俗よ
ちうをとうを意をとのをを甚方とのくを彫の逆されいをとうを
うへとうをうへを事論なくを書紀神武紀よ諸を宇毎那利と
海くを業中をうを松をうをうをとうへとうをのうを當
時乃言よむへとうをのくハ諏をはををうを事ををとうを此歌
なををうへといををはをうをやうなくを同をうへくかの新撰よ
都子とあうをうへとをよむなうへを和名抄流類の中よ都

子乃俤字年間とあるを淺とて今とも云うまむしといへ
と称称しかのことを此ことろまでは宇間と云んと源
順の時やうく年間とをひしなるべしすれども源氏輔仁乃
本草和名まい部横とようて宇信とせり宇と年とい今古
たがつるのことを考よやうて馬とを彼物ふい無萬とかうり既
ま延長の法よりの乃名称みてをたるにより古方い雖さ
にえして和名抄乃採をきりなるべき称乃まく
おきるとれくるをおうしたがうて後世よりうて宜家て俤字
つるひとの法々偽撰の書出てより古書乃偽りいとる方
まのを引ゐて古俤字法とをうつり此事一ま白雪ばむへ

しなりうをとみ名氏書和乃ふ氏を法く又氏氏とうてあるこ
ハ年と考葉乃歌まて賓ハこのるうつ也ろうなるをうへしと
ようあやまりて彼うへハ皆むへなるす事とをひしうち歌乃
意をおうてめひむへ也ろうと書えるるの也こおるふうう
てを後人乃ひうしうを法とのたる事ムを考えし
○改訂ま草本氏おをとの本樂を落ちる草ハ色ち
りうをきみすをまをうへ云をいうをさまを過る法氏拙の
被重をこれたうなるひうるに今山風乃吹るる野を又
きい考の本ちくく志をうれいあるへとハ名ふをいまれさ
ゆうを云をこをとうるハ邪也こ氏其法乃をこれまをうるを

又くにのくさきものと喫くらにあるすとあるすと
きとをり一首のうたの中のゆるひろ酒になんやさまた
此あるてらんいたとを海岸と望くこあるくとふ
あるくれ語酒を供唱ふてくるすを田毛を害すの者を聖あ
らくとふあるくれとくゆすくく

○初學記新撰字鏡に芝折とかき菓菓を梅花雪合之
平礼氏古事記日本紀を八之平利乃酒とある代数
四綾まる酒の事といふる代非也まつまるくまるくまる代
言乃をとく異也まるを代まるへるくをなまい綾をを濾す
いきふあるす拾ふ古事記を八鹽折之酒とかゑく

元大枝氏也
音人の長男
孝子大江
改名立一

やしほをるを乃酒也日本紀を八醞酒と書又是を古事
記ふまりてやしほをりとよむ也されい古事記日本
紀とをに八之平利乃酒と書しを事をかくまるを
らかすれそを其名義い私記を或説一度醸熟綾取其
汁平其糟更用其酒為汁を更醸之如此八度是為純
醇之酒也謂之鹽者以其汁八度綾返故也今世を謂一
度便為一鹽也謂之折者以其八度折返故也是古老
之説也と云も此説更うるを所侍也と八醞酒とそのこ
やしほをりのとけとを為一鹽とするを代こまるものも

大江千里　清和帝御代　大江音人ノ第二子し

千里ハ博学宏才ノ人ニし此哥ハ白氏文集ニ燕子楼中霜月夜秋来只為一人長此句ヲトリテ云ヘリト也

月みれはちゝにものこそかなしけれわか身ひとつの秋にはあらねと

古今集秋上是貞乃みこの家の哥合の歌とあり初学云秋てふものハ天下の秋なるを我身ひとつに思ふ事を一つに悲しとあはれなるこゝちを述す是也政頼ニ千里ハ儒家にて文集中乃秀句を題として詠まれける歌多しされは此哥も燕子楼中霜月夜秋来只為一人長といふを翻案してよまれたるにやと云り

○初学云皇朝乃歌文なとに唐の古事を用ゐたるはいまたしきほとの人のする事也皇朝にかきりてもふるく古事のかはりおほえきえぬ故それを云ふは非也大かた歌は古事を引きてよみぬ思ひをたゝへよみそて只其趣をたすねんとするのみされハ唐にまれ大和にまれ世にいひならひ聞なれたる事ともよりくるにまかせて詠さんする自然のよしそ更に論なきことなり何そ和漢を弁するそのまゝあらん文也人乃此志らぬ所にハ古云といひしを妄りに用ゐたるにあらすんや皇朝の古事なりとも人志らぬをハ引用ゐたらんや此如乃古詩をそら人事ハ過ぬるにあらぬも也そを皆其世乃人以不解もせる白氏乃文集或ハ詩経乃類也まつ其題をよまんハ此論のさかりにあるへしいはゆるさるへくハ世ニ志らぬ故事をとりいてゝ人乃耳目

菅原ノ姓ハ元ハ土師(ハジ)也土師(ハジ)ノ古人(フルヒト)光仁帝ノ時大和国ノ菅原ニ住ス是ヨリ菅原ヲ姓トス延喜中右大臣ニ任ス

をだしたまふ都にていまそかりし此人ハすなハち是なれ

菅家　御諱道真　字ハ三(サン)　御幼名阿呼(アコ)　参議是善ノ三男ニ

此うたハきぬさも取あへず手向山にもみぢの錦神乃まにまに

古今集羇旅朱雀院ならにおはしましける時手向山にてよみ侍るとある此詞ハあまたと此うたハ数寄ぬ我ぬさなどハえらむいとまもあへず折らむ山ハ紅葉乃錦つくろむ織りけて神乃御心のまゝなるべしと也されば御心にあきたらぬつるを又同時に素性法師も旬にはつかまの神をまつるべきに紅葉にあるゝ神やへさんとよみてもひとし此うたのこゝへ也此うたとは是まできにくに城まうし給ひける時て宜へ

里高市郡に山荘ありしをし事諸紀にみえたりけれハ此ほとりたびくそこの所まひなんすれハ院を此うたひ彼山荘に立寄らせ給ひし也又まぬまの類ハ糸を中略してまくとの事を以て今ん氏まゝ少ても山なまゝ山也それよ糸をそれつくまゝりとなれ自然の錦数まして以ひさむるに似さまされハ併ふまふと云ふ糸文字とハ間かゝす併乃を甚すとはひとつなる心をあらせくはかひおすかたへるふさ折るハ又自然之奇へいこそとかふてにをはまを糸にしとそへくいそこそ流と云へはうひなせりさるを諸抄まゝくはまくに志かくといひあまうす意ありとのこゝおもへるハたゞへり古今

に別まてといふ山の桜にまかせてんきんあしハ花のまゝにぬく浴に
と顕輔卿乃契しを命とたのむ歌あれハけにさることゝ思
らるゝなり又ハ萬葉巻四に春風之聲尓出名者有去(ハルカセノオトニシテナハアリサリ)
而不有今友君之隨意(テイテナラストモキミカマニマニ)同巻十に霊寸春吾山之於尓立(タマキハルワカヤマノヘニタツ)
霞雖立雖薩君之隨意(カスミタチトモ井トモキミカマニマニ)巻十一に吾身一者君之隨意(ワカミヒトツハキミカマニマニ)巻廿
に手之伎安我未波伎美我未仁麻尓(ヲシキアカミハキミカマニマニ)なと巻々に見えて
みなおまかせといふすつると同し意にて然るを謙遜して
あらす唯まかそまうなとのほとのこゝろにて其事乃上
にもちゐる乃ミ甚はよれるにてこたまくくゝる意に聞ゆるあ
まかせるはさてきくを其のつてを附なす文撰引者隨(アツサユミヒカハマニマニ)

意依日友(クヨラメトモ)云々 事此まゝぬく歌ハ多んなとの如く中間にあるハ
すなわち渡に浴きて此ゆる事編まり古今此急に作られし
こひのまかせよきともこんとなふ言を歌昭の本はこひれまかせま
よ徳ともむとおもひて永すしなれと都の歌まてもゆるやかに
調乃自然なるをもの也太やかに永久字に換へるをあたりふへし
㊀段鏡之都を出し幣(ヌサ)をもたむけすゝてそれハ君の御
供を給とこひく私の祈りに心なかりし故也志るをも向
山ますおほけれ幸ひましそ山乃紅葉盛りなまゝは是を幣
とすへし此たびさは錦なれハ神の思しめさんするまゝに
とけよへと也とのへり初学者にも此ことひハ意乃深き侍ふまゝ私

の都に遷ちるふることを世の人乃紅葉の移ひゆき都もあられ
いまはれいろ神のまにまに向まゐのすり地とぞ言ふこれ詞
書よなつかしき古歌乃深きをうけつるものをいみきさい
の地詞書を朱雀院ときとあるは同集雜ときは朱雀院乃
みとを市引乃殿御らんせんとて又は皇西川ふおたゝ寄
しなる日なとある歌ひまそその時と所とを考へる乃こ
歌乃上にさる御代をはつ人まり考る意あるふ行ふ
ゝく考へ御ことを捨と和ものく私乃撰のよ心すく又
私乃都にさしたゝすとなゝ考へ考の都とはもく
ゝゝくこゝ事也おまゝせく世ゝ考へいゝゝすとゝ考へんや

こゝをゝゝ考へ歌の中ゝ記ぬをけゝ乃移ゝ考へ
を向まゐのゝせんとゝ考へ作ゝを歌とゝ考へ出ゝ考へ
ゝ考へまゝとゝ世ゝやけ私乃都拾ゝ考へ取ゝ形ひ移
ゝゝんや歌乃中ゝ考へゝゝ世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ考へゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふ行ゝまれ拾ゝけゝて行ゝゝんゝおゝゝく其拾のすく
ゝゝゝんゝけゝゝふゝまゝゝけゝんゝゝゝゝゝゝゝゝ
出ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
諸拾乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

法の代まに事ふ世ほーめきんすまくふ文ゑとうゆ迦
とゑとわまあん事ハ英ゑ豆ゆへ一事竟四一めきんす
ゑまくに更弱へとうひ神乃まてひ多四まゑしすゆなとうゆ
ハまゆくとうひあまゆすてにをはとゑうとうより礼譲又都を
由一四ゆとを取あつすとうひうとう一ゑうとうとうにま
ゑうくうををれ一法院徹約を好ませゆとゑとを大和
摂津河内乃遠ゑゑとうを巡事一ゆんまきひふ
ゆすりうう陽ゑうひうゑん沙や右大將ゑうゑれ人の
大御僧ゑつうへゆまりまゑ結つなうやうゑを直人の奴僕ゑ
法ゑん事ちの強ゑふひとくゑものを取あへぬゑまふ思

ひとゑれるハうりあへすとうひ頃と高遠倉卒ゆるにゑひ
源ゆうゆれひの事なう一都をとうひ拙とうけく
ハうゆれひとゑゑれあゆすゆをあつすなとうゆとゆやうて意
を頃をたううゆと同ゑうゑれ猶也ゑゑふとうゆ
大ゆうをまうてゆうゆ事ふハひうくかゆゆう詞ゆそたく
ハ業とうゆとハかくうゆとうなり枕とうゆとハゆ如ゆ事と
なれうゑゑ一其外を苗とうゆ豆とうゆなとを植ゆゆ
かゆくゆにく皆ゆれこまてゆを如ゆを撰く植ゆまうゆ
取あゆくかゆくうゆなとゆうハうゆとゆの一ゆて拙
ゑとうくうゆうくうゆうかまうゆ也ゆれい都とうゆ

父内大臣為忠
母宮内大輔
弘益ノ女

三條右大臣　御詠　定方　勧修寺家ノ元祖

[illegible]

[illegible]

ゑすまこふ引をきそんさうとせやすものなれハ
ものゝよろこはしきあるまの事雅をもつてく和歌一今世の意ハ
て思ふことはりハ當の縁うとゝなるこゝろ人今を内と
ゝりにくハ專ら松尾にものせ海ものまてたゆ世ゝ
ふたりあるまさるよい藤ゝ事にこの數語をつゝく常ふ
きゝりふ古人の詞ゝ歌をこゝ人ぬるいまつ集ゝて代事
ものまてたゝる名ふ世山ゝゝ歌ゝ代ゝゝ歌ゝこゝものゝ
也ゝて来ゝこんゝゝ歌ゝ意ゝ人也又拾ゝふ
名ふ世はゝゝゝ代ゝ世ゝ人乃名をゝゝゝゝゝなゝゝ
やゝんゝゝをゝゝゝ意仮ゝゝゝ又意仮ゝゝ

ふふ孫をゝゝゝやゝゝくはゝ雅一同集ゝ神ゝゝ世ゝ
はゝくゝゝ歌ゝ神ふゝゝゝ色ゝゝ人せゝ清正集ゝ讃
備乃みやゝ所の市ゝゝにあゝゝゝふ文ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝふゝゝゝゝゝ須藤代海人ゝゝゝ和
ゝ人ハゝゝ代乃みゝゝハ藤ひゝ第補集ゝ兄乃名
乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ元補集
ゝゝゝゝゝゝゝゝ富ゝゝゝゝ命ゝゝゝゝ
當ハゝゝふ人代ゝゝゝ事ゝゝゝ後拾ゝゝ
道雅三位乃ゝゝハゝて松ゝゝゝと松ハゝゝくゝふ
ゝゝゝなゝゝゝれ長後集ゝゝて歌ゝゝゝゝゝて

二形まてよあるを此外を考へふるに此方をもて新しきやうに
を今乃はゝ書れまくにくい通ての歌なるを試こゝに作る也
此条れをもけるまき事とをもをそろくに奔しこるかゝ
○改新の初の典ゝ名ふるすの方をもてまことに意味ま
ことをのうるれとふるつまれわすれ都名をもひくを名ふ
しはゝつをこゝはんとうの歌をふれ同しかすとくこひ
わくしてこゝふるに那也ふれまけしくを名ふ世はゝとへ
るを名ふるすの歌なしすとはゝこゝひをこゝい此海を
つゝはゝうん又まゝとれをの篇れとるつふるはゝすとい
一ふい敬くくまる序歌なるれ格をひてゝるゝやゝ考しゝ

意味ふれをのうるゝなるやうれとみをまにあゝい歌はを
をゝこゝれ事出くを名ふ世ゝとうゝん加ゝはれ意ゝ其
抱なくてはゝ形ゝつゝこゝひん新名とゝふ何ゝい
意ゝうん名ふ篇なをを強くをゝんとせるひう事也
○初学の世れをふ引くゝ和歌くをうをゝふゝをゝすし
を帰をゝん名ゝ世ゝとゝ也ゝ也ゝをゝて意味れゝふ
作新篇れをの且ゝうゝふゝるゝを名はゝうゝゝを名
ゝ其事を見ゝくゝれゝをゝこゝふゝ非也其名ふゝとゝる
其ゝ何をゝをゝたゝをゝ其抱なをゝれ其名ゝあゝふゝう
ふを思ひをゝて意味をゝ高なゝを出ゝゝん色ゝ河ゝ四ゝ

海母ハ
陣屋人康
祝王ノ侍女
寛平中ニ
出家ス
日八年
播磨承平
六年大変
小一條ノ
又花山院

く無くに成りくれぬとて、きのなりんやうもかれとあるを聞まゐらせ給ひて、とんてうをとんてうにとりあつめ給ひ、拾遺集を撰ばせ給ひ、其へきものなりと思召すより乃男しうに通ぜられ世に其へきものなりと思召すより乃

貞信公 海諱忠平 基経公の四郎君 貞信公ハ諱

ことなりし

拾遺集撰ばせ給ひ侍ル大井川に海ありて行幸をもとめ給へき所也と知ぬ世なり事乃ゆへ奏せんと申てとゝまり設覧よ大井川の船遊ばせ給ひ取り敢ず小倉山乃紅葉に心をとゝめ給ひ甚忠とゝめ給ひ

拾芥抄曰
貞信公ノ諱
云延長八
年六月廿
六日薨御
清涼殿ニ
時侍臣失
色共心中
帰依三宝
殊無所懼
大納言清
貴右中将
希世尋常
不事仏法
此両人已當
其映云

うけ給ひて、まかり出給ひ、其ゆへ奏聞すべしとあり、いそぎ行幸あるべし、甚所まをしたる事なりとて、結ばれとの心也とゝのへ給ふ小倉山とは嵐山也此事門人橋井田忠友ノ著ス名跡隠部よりくく毎ゝたまはるふいなり

○初学よ大井川行幸御考として別よりかゝり甚文ものられいとゝ勝す甚大むかし此小倉山乃歌の御考ハ殿延喜七年ハ行幸のまへ二年ハ好よ聖乃御遊の所ゝ此所ゝ御遊ゝ御遊ゝ仰ゝとゝ給ふんとゝてゝ行き給ふ後ゝ行幸ハ法花とあるを海せり行幸ハ延

寿七年九月十一日にくれの歌を詠たりて貫之等歌
をまねる事なるゆへ古今集に後撰の端詞法皇西河よ
りかへり給たりける日と二所まで書るを不審して諸
書を此部にあつめ考へ侍に古今の序に殺とせるに古今
の詞法皇云々と書るハ偽なるへし古今に法皇と書
天皇とあるをたんを倒の後人こゝろ得へうして法皇と書
るへきなるへしと云り奏し侍書を法皇とせるへ
し景樹按ずるに亭子院大井河行幸とあるハ日本
紀略に延喜四年十月十日法皇幸大井河有御歌事
とあり此時なるへく侍ゆ同月十九日天皇幸大井河

法皇同幸とあるに成やうに奏し申侍
なるべし扨て相模ゆ伊勢へ下侍なるなん
歌を此ところにそなへられなるへしとゆゑ
うんとゝみ玉へるうもるをかつ〻とり侍よく甚う
とせるゆゑ也とあるもうんを御歌事とまをせるハまれ
ゝまをそなるなるへし此ときゆゑ西宮の四十七ゆ
た大井ゆ出ゆ事ゆ侍ゆ事なるをゆゑ侍ゆ
れいこの大井河行幸ハ延喜七年乃行幸より此ゆ
事乃後なるへし大和物語ゆ此ゆ事をとゝ奏せられ侍
と興ある事なりとて大井河乃行幸とゆ事ハ

給ひけりとあるを世俗京極殿とぞ申すめり
されど紀貫之の土佐日記に
延喜七年九月十日の条に
紀貫之九月廿日の条に
はしむ
と宣ひしく今しも色代なるべきかなるべしとぞ
十月廿日迄源氏は紫式部の日記乃清書を十月十日
給りとぞ
とぞ

按するに此拾遺集の撰者を弾正尹敦忠卿とぞ
や云ひ伝へたる
この七夕紀貫之古今集
云くと書れたる
望を
主は
乃延長四年紀貫乃
ひるよ
楽なり
とぞ

も法皇は大きゝとゝほゝ[illegible]
さて[illegible]ある[illegible]方好[illegible]
ふ如[illegible]
なきゝ[illegible]
動揺[illegible]
きふ[illegible]
[illegible]
[illegible]

乃識者この序文をもて十一日にありて再昭の九日をいつる
也とて史はやまりと挙げなせるはいつりさ事也歟
再昭（ヲトツヒ）とも云やうきはかりかの序文に書うつし書月乃
九日ときはかりにくとあるをいふ九日也とさはかりと
云事はうれるとや紀略に延喜七年九月十日法皇石
文人賦（ニ）眺望九詠之詩（ヲ）とあるこれにら大井河法幸南
日也とて眺望乃字あるこさふあるこの行幸乃歌
を其数九首なるふく同日同題なるこもこ聖
十一日乃除目伊勢奉幣天皇御（ス）八省（ニ）依（テ）光納言奏議
有実給宣命（ニ）其日天皇幸（ス）大堰河（ニ）とあり此天皇幸大

堰河の一句舊紀乃序文に前日十日とは法皇石（ニ）文人賦
乃字をこれをこと紀略の撰者なる前史乃誤を見ひく天
皇云とは白を摘こく次乃十一日の除目に属せるなるこを
こも十一月八省院に出御ありて伊勢奉幣はに宣命をた
まふ其日大井河乃遊幸あるこさるを事はこられぬ
ものにて舊紀乃法幸はるをこるこんを考うんと
思ひく誤きたるこやの序より服るこや今知るこて九月
十日天皇幸（ス）大堰河（ニ）法皇同幸石（テ）文人賦（ニ）眺望九詠之
詩（ヲ）なとて序文乃法こるこん十日はもとより重陽の後
宴なるこ其数九首乃歌を出これ文人大井眺望乃

詩と成し其詩歌をもりて歌人乃詠をもとり也されハ
そとりくく歌乃歌のさまにあらす中ふを翰海よたてり
といふなりとかさりて霜翰立洲とありてん其ゆゑハ彼
序ふ霜の翰川てよりてこれをとりてとりられと書
れしりそこそかきりてかきうつ此詩乃歌と
をみ給白鶴をよまれしてふを霜翰なり事なりと也
又史本集ふ延喜七年春五位の侍門の西時西河紀幸
せを新ふひろふ忠岑新和歌序ふとりて其文を引
きてるとりて序文を貫之のをみはあるすとりて
實ふ歌のく事如ていをもりてくさ事なるとりてる事

みくめそこられい此ゆしてそりて世ふはすてたゆつ
らんそこをたゆなとふ其日序歌ハ貫之乃ゆ作とう
まつりとゆしてのけふハ推あて也梅すふたよそ例業
九月九日ハ南殿ふて重陽乃宴を賜ふ御會あり十日の
後宴ふ法皇紫宸院ふて同しく重陽乃歌をもりて
文人詩を賦して其事なるを今年ハそのまわを大
井ふて都をせをりられ十日の後宴ハ法皇乃
大きあるてなるまるきをやそて此小倉山の中歌を
ありて約事をありつをはりて世ふ取をやくらんふ
紀略ふ方有詠歌事とのをあるはあすたりぬく

ちはせこゝのゝ中に彩こゝに此海影のすゝはあゝゝかゝ歌ふ
人あまたゝ絶ゝすゝ志ゝう甚事世ゝ生ゝゝゝゝゆゝゝ見ゝゝ
ゝゝ記ゝゝゝゝゝ地ゝゝゝく此時天の下ゝ共詩のゝゝありと
尚ゝて歌よゝむゝゝこゝゝゝゝゝの歌ゝゝゝゝゝて公ゝゝふ
いゝゝゝ出ゝ習俗なゝゝゝすゝゝく影の事ゝゝ大ゝゝ奇て
ゝゝれすゝゝゝゝかゝゝゝ乃勝事ゝゝゝ時恩ゝ書れ
ゝゝ同紀延喜五年九月十一日乃條ゝ先大臣於東宮直
盧賦雜邊者歌之詩とあゝゝゝゝ乃歌ゝゝゝ甚ゝゝゝ
ゝゝゝ伝ゝゝゝゝゝゝゝ詩ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
う書出ゝゝゝく歌ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たやすめうたにとくり貫をぬき地名をみてうの所道を
のけられるいとなりと也なり
中納言家嗣　御使寺家の元祖良門の孫　右中將利基の子
みちの原のきて流るゝ川のいとをきてとひ〳〵ゆくらん
新古今集巻一歌　しす初学ないつゝ事をれおんなとも
ゝふ流るてかくまて為ゝよりてかくはとみつゝ咎め
なりゝ元ひやまれぬ也ゝく難原い山城の國相楽郡すて
聖武天皇奈良より志ゝく都をうつされく久かの都と
ゝ流ゝる也泉川も同所よりまゝわきてはいつゝい岩間よ
り流出る拾ゆゝる泉川とゝんとてゝひ且甚泉川を

いゝ川ゝきてかゝるひいたん料のゝみをくよ所也とゝ
新古今集巻三　川顕ゝ兼輔とてよとそふ
乃ゝ流ゝまゝのゝを吉野川ゝ流ゝ形ふゝるれ初久んと
ゝ古今集巻五　ゝて甚歌より者九首にあゝて
此ゝのあり甚同ゝあゝ古ゝ人不知ゝ也世中いゝそ
大和ゝゝみゝまゝ川とゝゝもゝそれを新勅撰雜四ふよ
ゝ人ゝゝとて大ゝきゝゝ今ゝ也ゝゝ下ふ同ゝ影乃歌
流ゝきて世首合ゝ世九首世首の中ゝ也業集の歌を
まゝわゝきゝれい吉野川乃ゝ兼輔卿ゝて世俗いよゝ
人ゝゝ也ゝ拾いゝ化者ゝ者ゝすゝ本乃ゝゝなゝぬふ

より集めたまひたる歌ども、まことにいとかしこうて入りまたるあたまとられたる
事多くきこえいと世のもとよみ人しらずなるを新古今集などに
やまりて業平朝臣の三のこそ入りまたるを今いとおかしう侍
つる也とのたまふ人きこゆる也

源宗于朝臣（ムネユキ）　父は光孝天皇御子一品式部卿是忠親王也。

山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草も かれぬと思へば

古今集冬部に入れてよみあるとあり山里の柴の戸をあれとみる草くらうまときられまと人めはかれぬるふる郷の子
草をうつかまぬまいとも也られぬまいとのひてもたりあるとれ
ぬとおもへとのへいつ月ぬ強乃上ぬて花古今にて多くきこゆ

ふ忘れ外なるもの也侍よりとふとれぬまいなるとふ
へきをとそんとおもへとそれぬまいとあるとあるへ
るたちひよ似ぬ甚言そひぬまい歌ふとあるへ
とふやなすへよ歌ふもと甚きれ歌ふ問きを
○改観は草とふつたは恋のこまたかふ人事ふを
やふふ古今集雜下世界とふふ乃事ふとやあれ
うれ歌の名ふ出んとふ人事ふとひろくひくうの
むとのこふ侍なそふ人ふ初学ふとすて
乃事ふを拾ぬふふ非也事をとふ人ふ
おむへふまそすれそふ人ふを事をとふ事ふを

とるなんや又古今の言葉世中をとゝのゆる甚しき草木
のうちとてやうとゝのゆる都は色々出るゆゑ意をつゝ
て更にこれと新すべきゝやうやそはりなん垣
根はこゝろ此萩落うち枯たる初冬乃さま使ふたりの人
しこと山家とゝふいへい深林幽谷はさまとよむ事とゝも
潜こゝろ浩世はこゝろまつ草葉よりも枯のうへとつゝ色
き事とゝつゝまち此まとゝも迚古人の歌ハ見るものきこと
乃ようはこゝて常の心此和歌なとゝ言くい歌
迚きあゝりとゝゝり今ハすゝる山信なとゝまとゝ此ゝ
よ取みゝゝ五伝ゝ

○初学ゝ人目とゝ枕草子ゝ人なゝくゝれる耳とゝきゝ
ぬゝれとゝつゝ此ゝゝ此ゝゝ耳とゝつゝ今ハ見るゝ
ゝて目とゝ迚とゝゝるゝ彼草子に枕さゝまゝゝて人ゝ
ゝくゝなゝゝき耳とゝゝゝ歌ゝのゝゝと思ひゝゝゝとゝゝ
此文とゝゝゝ引ゝゝゝたゝゝゝなゝゝゝゝゝ歌迚此ゝゝ
ゝ月ゝの抱せゝ草ゝゝたゝゝゝゝのゝ書ゝゝゝゝれゝゝゝ色
き文のゝゝふゝゝまゝゝてゝゝゝゝゝ

吾聞之耳ニ好似巻十ニ言云者三三二四八能宣なと
を聞つゝ引ふるてきゝかゝれ事と耳ニ聞ふ
そのゝ比平信也と世ひなかりて古人の作と作
り出せる歌也と思ひなるよりこれをも清女乃筆跡
妙新なるゝ舊説ハかりより編するにこそて人目ハ
人比ゝ事ゝてかゝより我目をつけあ事を
くハ彰さゝ耳なる比自他乃たゝひ侍るとやよ清
すゝとゝ比流引出へゝもあらぬ信也

凡河内躬恒

祖父詳ならず或云良岑ト云人ノ子ト
仙あてにとゝやゝん初霜比さまゝゝ白せるしゝきゝ比

此姓元ハ天津彦根命ノ後凡河内ノ國造ノ子孫

昔此姓ノ人代ゝ河内國守タリ後世河内守ノ如シ躬恒其子孫世ト云ヘリ

古今集秋下白菊乃花とあるとあり初霜の垂ゝて
りゝをまゝとゝ付すゝものゝりをゝんとなゝ比只世ゝはりふ
や折ゝんゝゝんゝゝれそゝ花と比ゝんゝくゝゝきふあゝすゝとゝ
朝ゝを保ゝ霜比色ゝとゝ世ゝゝゝふゝ也初ニの白ハゝゝハん
あてゝすゝやゝゝんとゝゝゝきゝと謂ゝ比ゝゝて世ゝゝゝゝ也
○改觀ゝゝゝゝゝゝゝゝんハ形ゝ詞ゝあゝすゝゝゝハゝゝんゝゝと
ゝゝゝゝゝゝゝれハ影の觀ゝゝゝハゝゝの字ゝ中ゝ霜ゝゝゝ也
ゝゝ白菊ゝ霜比世ゝゝゝて人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝあゝゝ
菊比世ゝゝゝ初霜ゝゝゝゝ降ゝゝ白ゝゝゝ比同ゝく出あひ
てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝひ殘さる迚是等の事とを世ふりて興ゝてよめる
也とゝ可ゝ云ゝ人あてゝ云ゝんするなれと形さてれ
きて無ゝすゝ〳〵とゝゝるやゝ如非也まつゝゝいゝんやゝ
文字と世ふりてゝけゝんあゝくにゝゝけゝんゝゝ
ゝゝにゝゝゝゝゝの迚されとゝゝんゝの意とゝんやゝけゝ
ゝゝゝゝゝ可ゝ詞なゝすゝゝゝゝゝ平仄ゝゝなゝ詞迚又
歌ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
い非すゝゝゝゝ又詠ゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
みゝゝゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

世ふりたゝてゝゝんゝゝすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とも也なとそるすへく何のすとゆそれすもとより
をそ〳〵やをそんとそるは天ふかきの河乃影のよにう
次所ゝ人民側のまれるゝ所ひとり言なるへし文学
業の年者也紀南ハ吉野ハ紀南ハ吉野ハ歌辞まてよく関えてる
奇也年者也將紀榜者無二ともまて年いつるんやと
ナ之てきくるまあひとてハ俗ゝうりて都そも
たゝひ行るそ巻九よ於久礼居而吾波也將恋春霞
多奈ひ久山辛君之城吉者ハ吉者ハ於久礼居而吾者也
將恋稲見野乃秋芽子見都津吉宗武ゝ故ゝなと
あるとも用てをはまて歌いるん我いとりんとるやれ

歌撃乃ゝ人也

壬生忠岑　天足彦國押人ノ後　和名抄ニハ壬生トス

世の乃清まれくゝ人ゝ和ゝ和ゝ歌ゝ
古今集ゝ三部ゝすゝ
乃ゝゝふゝも忍ゝさゝ
うゝ拙ゝ也在明のいゝ
世乃中ゝ歌ゝ世乃中ゝ
なゝ人乃清ゝ
言ゝ合ゝ
世乃ゝ歌ゝ

すと云題の所より出せりさまた歌のうへに帰意とうろ
へしと古抄より侍さてしつるはいう所つ
○初学より世よりと人行うるふつまの所く下細そくとたあくく
嘆くうるよりおき帰りまうるよりうりより浦い人のたまれり
しいたるものみく晩れとうきこの所とそひなりくこと
とつるふ所也先此方い意のうられふ所く細のうへ本末
をり合うて同ゆりうきまいうるくより所く詳あやまつ
事より侍り別きまりとうひくい此詳のとくうたこの
よ思ひ歌ゆうなといたていうれたるとうき拙いなしと
ひすてうるたつるんちする也こたきう思ひ感ゆう後

ハ何より晩うるうきこの所なしとうるうく思ひ感ゆ
るとうる所とたきうるく今いうきう地よ来うるを一む
きふつひたれちうる也思ひ歌うるとつうこたこうるの別き
よりよりとてありて別きより思ひなりて晩うるうること内
に来めうるうる也と知しうき拙いなしとひすてうる
とそひ歌うるうと詳なすへうんやきうたこ語勢をたうひて
ものより歌のうるふあうひ歌の本うを詳とうて言と
ひうをおうひうきたなきたたおきいきとやゆうるの甚理
と推宮むきたつうをたうて事のうるを知すてく此歌
の書るうの所碎うハ劇場すて昔あるうんるのたきま

を今乃現ぶうて意をくゝとゝきさゝゝきて方にまのひなせ
るゝ其昔ふをけるゝふまきりてあいまきて面白よものゝ其
實てよかれつて事ハかゝうゝおとゝ孫ゝ孫ゝとされき
てきこれるゝをゝゝ加つくあやゝるゝなよ却て調聴とおを
ろうすものゝ紙中ゝ世ものゝ紙ゝるゝ田先の浦鶴の稲な
とゝゝゝゝゝゝ其紙ゝりを立まきりて義よゝをゝろく
ちゝろうゝとゝゆゝりゝゝ其面白ゝうゝて浦ゝてゝふを
まゝとゝせんまいとゝくゝたゝゝゝる事を浦ゝくんや意を開ふ
ゝゝ又同書ゝ都例ゝ支の例ゝ良本の約ゝて言ゝゝと
ハ顔同無ゝふゝあゝれむゝゝ事をゝんゝゝゝて面強

くしてあるをゝふ業業ゝゝ縁をなくてあるものゝゝ
て為ゝゝふゝるゝゝきれゝと立ゝゝゝ右ゝゝゝと
ゝるゝを那也按ふ法まきれきゝ無伴侶ゝ意ゝくりて
いゝゝゝる業業ゝゝ縁をなゝゝをゝるゝゝゝれるゝくゝゝゝ
方ゝりうゝりて法ゝゝ心法ゝくむゝゝゝるゝゝを法ゝゝゝと
ゝゝるゝふゝゝゝゝゝゝあゝまゝむゝゝゝをあゝまゝ幾
むゝきゝゝを必ゝまぬゝ人ゝるゝなゝゝ獨ゝゝゝれまゝゝ
必ゝまゝゝ彼ゝゝゝれくゝゆゝりゝれき方ゝなゝる迦業業
業ゝゝ都礼も無將有人乎寒十九ゝ都礼もゝゝ久可
礼ゝ之妹乎なゝあゝゝ法後のゝゝ同ゝれゝ為ゝゝ

小用ひすとをつくうたいぶ者よ志ちうひくくまこ
きと世間の恥をかくれまくこ家ぶるいやてかつつ
まれまさきれまたきちうひるれくるすり今い枕すを
おくるこの世これをたくあなされ紙也とつるい例の更うこ
しつくものとつつ事をつあれといつるのを世よ世ゆしくぬ
詞也ま十ちう頃あくむうをせよつつあない杉をなすと
いたんな用をなれい侍よ面目れとつうて碁杉を
強きとつる言うはさ
ひ侍

国立公文書館
National Archives of Japan